アクセストロベリー

白紙描写

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
アクセストロベリー

【Ｎコード】
Ｎ５５５５Ｘ

【作者名】
白紙描写

【あらすじ】
イトコと結婚する物語

1

「うっわ～アイスが溶けてる！」

粉塵売買　コトシラは、街で買ってきたアイスを確かめたのは、クビルトノノセルと言う田舎町に到着した後の事だった。

「やばいなー、腐ってないか？このアイス」

『我バルト王国』の首都『ノキベ』のとある一角にある商店『ハジキ』の味の良さは認めるも品質の良さは一役買ってない。
アイスをぺろりつくのは、家に帰ってからのお楽しみとばかりに、懐に収めていたのが運の尽きだったと、改めて解釈する。

コトシラは、今年で１７だ。
独り立ちもあと３日、ワクワクが止まらないのです。

「仕方ない」

一言告げて、無性にアイスの袋をこじ開ける。

「やべ、手に垂れた」

不器用なのか、ストロベリー味のそれが盛大に、手にかかるのだった。

「友達居ねーのに、この少惨事、どうにかしておくれよ…」

無情に、ショッキング。
明日は、襁褓破壊試験が待ちかねているのに、気分転換に、ろくにアイスも食えない有り様。

ああ、いっその事、家を出て、立派な剣士になりより、勇者になってやろうか。
…

甘くはない。そんなに、人生甘くはない。
黒砂糖よりも、甘くはない。分かってる。理解している。
世界は何を中心として、回っていると思う？

「それは、太陽を中心として、地球がグルグル回っているのだ。何処にも中心なんてない。中心は誰かが決める物なのだからだ」

決まらない言葉を言い放ち、地元を翔る。

次回
本編は、まだ始まってはいない。

←続けて、
地域

地元の空気はとてつもなく、何事にも代え難い独特な味をしていた。

していたのではなく、している。

何か特徴のある町並みでもなく、本当に何もない地味な所だ。田舎という物は…

でも、無くなっては成ってはならない場所でもある。
その様にして、鑑賞に浸っていると、つかの間の出来事と、悪夢がおそったのだ。
地面から息なり、何かが飛び出してきたのだったからだ。
「うわ、」
凄い勢いで急展開を迎える。少しばかし、休憩したかったんだけど、それは、待ってはくれなかった。
「なんだ。何が起きた？考える時間くらいくださいさ！」
んなこと、言って、体勢崩して、すっころんだ俺。コトシラは、体勢を崩しながらも現場を伺う。
するとそこには、語彙では表現できない。怪物が居たのだ。
「ば、化け物！」
その通り化け物、しかし、コトシラにはそんな語句は、関係有りません。
だってコトシラは、背中にいつもながら背負っているはずの、大剣を所持していなかったからです。
コレは大変です。なにが大変かと述べて説明するのなら、さっき、そうほんの今さっき、開封したばかりのアイスが地面に引き寄せられ…

クッチャクチャに、成ったからです。

「せ、せっかくのアイスが…」

残念なことです。気分転換にしては長すぎる散歩を得て、手に入れたアイスが、
瞬きする間もなく、食べられないご様子へと変貌したからです。

衝撃的ですね。

このほんの一時の幸せを実現するために、果てしなく遠いと、錯覚する道のりを自前の二本足で、せっせと歩んで来たのにも関わらず…

見れば、現実は皮肉の固まりですね。

言わんばかりに、地べたに溶け染みるアイス。

「あ、あ、あぁあぁぁ…　」

言葉も詰まり、話す言葉も感想も言えないコトシラ。

こうなってしまえば、前方の語彙では表現できない怪物は、見えていません。

終わりましたね。コトシラ。

コトシラの最後は、儚くアイスとともに散ることであろうよ。
さらばコトシラ。

バイバイコトシラ。
コトシラのことは、墓場まで忘れない。
コトシラ万歳。永久不滅のコトシラは英雄だ。

…

動き始める怪獣。唸りをあげ、高鳴る罵声と憎悪と共に、襲いかかる。
距離にして、身と鼻の先。
後がないコトシラ。
旋律と穿孔が彼をみすぼらしく罵る。

！

その時だった、僕らナレーターだって諦めていた刹那。
奇跡が起きたのだ。

イトコの古見子が直撃寸前の怪獣をなぎ払った。
過去形のように、怪獣は、５時の方角へ水気になり、溶けていった。

「あ、あぁぁあぁ」

コトシラはまだ、アイスの棒を双眸で見つめ眺めているのだった。
とても悲しそうだ。

「何していの？コトシラ？もう獣鬼は、葬ったわよ？」

獣鬼とは、先ほど、５時の方角へ飛んでいったあれだ、言わば、雑魚モンスター。

「だ、だって、お姉ちゃん。アイスが、僕のアイスが…」

イトコの古見子は、ヘボコトシラと違って、優秀な二刀小刀使い、とってもかっこいいです。
なので、コトシラはお姉ちゃんとあえて呼んでいる。

「何を言っているの？アイスなんて、ドコにだって、売っているじゃない」

違うんですよ。古見子さん。コトシラは懸命に歩いたあとの『あいす』が食べたかったんですよ。

噛み合わない。対人関係ですよ。もう

「おれ…おれ…」

頑張れ、コトシラ！

「おれ、自分をいじめて、美味しくアイスが食べたかっただけなんだ…けど、もう、どん底です…」

おい、コトシラ！何を言っているんだ？

「…」

古見子さん退いてる！やばい退いてる！どうにか、コトシラを正常

化しておくれよ。

「大丈夫。あなたは大丈夫よ」

大丈夫。ちょっとばかし無責任過ぎはしませんか？

「お姉ちゃん…」

ああ、読めてきた。だめだこいつ早くどうにかしないと…

「おれ、頑張る！いつか、きっと世界を取り巻く剣士に成ってやる！」

よく言った。上辺だけの素晴らしい言葉をよく言った、お前はある意味勇者だ。

次回

取り巻くそれは、更新系

2

「とりあえず、誰からぶっ殺しましょうか？」

「物騒な言語は控えましょう」

僕の悩みという物を赤裸々に、話しあげく、第一声がこんな調子だから困る。

もう少しばかり、優しい言葉遣いで励ましてくれないものかと、少しばかり困る。

「だってあんた、クソ弱いじゃん。だから、人を殺めて経験値稼ぎでもしたらどうよ？」

相談テーマは、明日の試験対策で先ほどのアイスの話しは、なんの関係もないただの漫才とかと思ってくれ。

「僕らのスキルがレベル数値で決まるんだとしたら、たまったもんじゃないな、試験にレベル差とか、撃破数とか、関係ないしスキルを観るから、アイツ等、」

スキル…すなわち、学歴とか資格とか。

アイツ等…審査員とか、審査員とか。

「あら？弱音を吐くのね。あなた、」

私なんて、物の数分で合格したわよ的な態度をとる。

「仕方ないだろよ、おれ、落ちこぼれとか、出来損ないとかの部類に位置する人間だし…」

生きがいと言えば、苦労のあとのお菓子や食べ物（主に洋菓子）なのだから、武道家はびっくりする。

「別に私だって、才ある人種ではなかったわ。ただ普通の凡人生だった…」

ーってか。僕より一つしか変わらないのになんて切実な談話なんだ。深刻でクソ真面目な人生相談をやってるようで気持ち悪い。

「所で、試験って聞いた感じじゃ。盛り上がりそうなイベントだけど、勿論、壮大な生き残り大乱闘とかしたちゃったりするのよね？

「いや、違う！今年は筆記試験だ！」」

二言目は早とちりと来たか、この人は、局面での切り替えが早くて、翻弄される。

「実技じゃないの？……なるほどね。去年がそうだったから、今年は無いのか。」

無いのではなく、筆記ね。

…だとすれば、まだチャンスは巡っているって事になるのか。

僕、体育会系ではない方の人材だから。

夏休みに一時ピークを迎えて、学問に禿げくんだものだ。

その所為か、冬休みはダルさと寒さのダブルアタックがクリティカルヒットしたもんだ。ペンも握っていない。

その成果は総合的に、絶対値０。
大した成果は得られないまま、猶予や期限が詰みっている。
最近は、試験対攻略本なんかをペラペラしている始末だ。
「なんだか、実技でフルボッコされる方がよっぽど、ましになってきた…」
本音語るコトシラ。つまりおれ。
「頑張れとしか言えないのが、偶に傷だらけ」
日本文語を的確に連ねて語らってもらいたいな。意味が分からない。
「所でここ、僕の部屋何だけど、勝手にゲームに電源入れるの止めてくれないかな？」
昔、古見子さんに保存データ消された事があるトラウマがフラッシュバックしたため、そんな事を言うのである。
「凡人は、凡人らしく、凡人以下なら凡人以下らしくだ」
名言でもないが、なるようになれ、普通を願うのも贅沢だとか、言う方向性で語るね。
独り立ちってのは、保護者の管理から外れ、一人でこの世界に生きていけなくてはいけない。行政側の勝手なルール。
古見子は、どこかの警備団体に所属してるし、今回の件では暇つぶし…が妥当な選だろう。
しかし、どいつもこいつも平和ぼけで退屈だ。獣鬼なんて、相手に

ならない。
昔は、恐れるケダモノや邪なゲテモノが闊歩していたに違いないのに、人々の高度成長し続けたあげくって言い伝えだ。

「まぁ、どうにかしてみせるよ…」

試験落ちたところで、取って砕かれるわけでもないし、死ぬわけでもない。
僕は僕らしくゆるゆると、人生歩きを楽しむとしようじゃなか。

「コントローラー、一つしかなくて対戦や協力は出来ないが、作業をしている様子を伺うだけでも十分に楽しい」

と言いつつ、体育座りで古見子さんのゲームテクを眺める。１７才。

「何よ？そんなに私のシューティング避けテクのが凄いの？」

凄い手つきで、向こうから迫る玉石を交わすわ革す。１８才。

…

一人っ子の俺には、何か、物々しいく暖かい光景。ああ、何だろうこの気持ち。

お姉ちゃんとかいなくて、友達とかもいなくて、ほとんど生きている価値感が感じ取れなかった俺に、こんなにも、和やかで誰かに譲れないようなこの感覚は…

「あのさ…」

カチカチ
　　カチカチ
　カチカチ
「何よ？」
「何だろ…か」
「？」
ゲームに夢中なのは分かる、だがしかし、今日の俺は多分狂っているのであろう。
「ゲームがあきたら、一言言わせてくれるか？」
何もないに等しい。殺風景な私室には、低音量の薄型テレビ音とワイヤレスコントローラー動作音とが非常に旋律を奏でていた。
俺の言葉でほのめかすのなら、混沌と無機質。
「？ちょっと、話しが読めないわ。今はなしたらどう？」
無傷でボスを粉砕する古見子。
「いいだろ、今はゲームに集中する時だ。今は集中するんだゲームに、そのあとに言いたい」
結構割れながらに、真剣に言ってみた。
「笑」

笑った。古見子は笑ったのだ。肩で笑う。
「ちょ、あんた、私を笑い殺す気？あはは、真面目なあんたが真面目口調って、本気で言っているの？」
…
全然把握できない笑いのツボだ。どう対応していか…分からない。
「まて、笑うな！笑うとはげるぞ。」
…
沈黙が走る。
「…」
ヤバっ、眼が虚ろだ！救急車！消防署！ハイライトが消えかかっている。
「よくよく考え手みたんだけど、アナログテレビの上に…飾りとか、どうでもいい。家具とか置いたりしてたよね。昔」
飾りはないと思うけど、何の話し？
「昔は、良かった…そんなの過去という曖昧な記憶とともに、比較した勝手な言いつけだよ。現に、私はアナログテレビ…ブラウン官のテレビの上、よく飾っていたもん。今はちょっと、寂しい…」
カチカチ
カチカチ

昔と今、…確かに、懐かしんだり、悲しんだり、するのは、過去の記憶をベースに、今にはないやるせなさ…が、そうさせているんだと思うよ…僕だって、

その瞬間、一瞬だが部屋の隅に置かれた大剣が脳裏に入る。

他人事のように言われる悲劇も、俺は１７才と、短い人生で一度だけ経験したことがあった。

黒いどうしようもなく黒いは、俺が体験した悲劇の象徴だ。過言ではない…

「寂しい…か」

次回

通り過ぎた過去の記憶

3

ゲームを終えた彼女に僕は一言こう言うのだった。

「もし、試験が受かったのなら、何処かへ旅にいきませんか？」と…

おれの家族はみんな死んで、僕一人。
おれが殺してしまったんだ。
正気の沙汰ではない。狂っていた。
武器による呪い…それはただの言い訳、おれは、単純に心が弱かっただけだった。
狂ってしまえば、楽だろうとか、もうどうでもいいとか。
そこから生じる、報われない結果だけが残ることも考えずに…

だから、そうなった。
元から一人しかいないのに、独り立ちなんて…笑ってしまうよな。
けど、最後の後始末くらいはさせてくれ、殺してしまった家族ともう関わりのない。
本当の意味での独りにさせてくれ。

昔の俺が志しにしていた唯一の願い。
誰とも、血縁や友達、関わる全てを無くしたいと…誰も何もいらないと…

「昔のあなたは可愛かったのね。」

イトコの声が聞こえたと思うと、

「答えは、『良いわよ』よ」

我に返れば、古見子さんは何か、言葉を返しているではないか。
え、おれ、なんて言った？

「あの～すみませんが、おれなんて言ってたの？」

うろたえるより、直接聞く。

「あなたが私と共に、世界を旅するなどと言ってたわ。」

そうか、我を忘れて、とんでもない事を言ったかと思った。が、思い違い普通だ。

「その答えは？なんと返したのですか？」

確認の為、再度訊ねる。

「オーケーと言うわ」

そうか、オーケーなのか。

…

「ゲーム楽しかったか？」

なんか急に、語彙不足と話題不足に陥ったな。これは何だ？。

「楽しかった？今期もまた自己記録更新って感じで、」

あれ？いつの間にか、ゲーム機が綺麗にテレビの下に収納されている。

！

こいつは大方、凄腕収納の達人でも慣れるじゃないかと言うくらい。
俊敏に片付ける。

「あの」「だわ」

被りもどきが発生した。

「俺から言わせてくれるか？」「いや、私から言わせて…」

やんと言う、自己主張したい彼らなんだ…

「ど、どうぞ、そちらから、…」

控えめに譲る。これは厚意だ…

「じゃぁ、宣言して良いかしら？コトシラ？」

…

「いいよ、何言われようとも、大丈夫だぜ」

イトコの古見子さんは、なんだかよく分からないけど、深呼吸をし始める。この行為に何の意味があるのかは、分からない。
だけど、彼女にとっては意味があることなのであろう…

「あなた私のこと好きでしょ？」

！

何を言っているんだこいつ。
なぜ、そのような文を紡ぐ？
誤記を誤読している。…ではあるまいな。
「ご名答。大正解だ」

カッコ良く口が動く。意に反していはないか？
いや、体は考えよりも正直だ。そう言う、相場が定められている、本でもって記載されていた。

一番初心に返るんだ！おれ！
初めての出会いは、いつだ！？

思い出せない。その前にイトコとかいたっけ？その前、彼女は誰だ？彼女はイトコの古見子さんだ！
それ以上でもそれ以下でもない！
血縁関係は若干使いだけの親戚だと断定する。
だとして、なんだ。
記憶があやふやなとか、記憶すっぽり無くなってるというか。
まず、おれ、友達がいないし。

わかった。全てが幻聴だ。
幻覚と悪夢に襲われているんだ！

よし、この話しを手っ取り早く解決する策を思いついたぞ。

「一発、殴らせろ。」

暴力で下らない。幻影を葬ってやる！。

「テレ隠しの行動にしか、思えないわよ」

何とでも、ほざけばいい。今日の俺は絶好調だ。

「俺が殴りたいと言っているんだ。殴らせろ！」

明日の試験なんて、カンニングでどうとでもなる。今の俺には、過度の緊張の所為で、可笑しな幻影が前方に座りすくんでいるのが、許せないのだ！

構える。正しい構えだ。

先生に習ったからな。当たり前だ。

「…」

「そこまで言うのなら、殴らせて遣らなくはないわ」

羽織っていた。ジャージを脱ぐ。

ガサガサ

ゴクリ

「さぁ、思う限りの力を握って、拳をふるうが良いわ」

無防備過ぎる。彼女は正座。目は閉じたままだ。

「怖くはないのか？」

「怖くはないわ」

そうか

「一つ、お願いがあるのだけれど、」

「なんだ。言ってみろ。」

「あなたからの質問は、何だったの？まさか、殴らせろ！ではないでしょ？」

頭に浮かぶ。

〉「あの」「だわ」

「ああ、あれは、もう夕方出し、帰った方が良いじゃないかって、言おうとしただけだよ」

「あら、そう…」

「いくぜ。これが真実だったら、こんな街さっさと出ようぜ」

「…うん」

バシュン、ズバキッ

……

試験当日。

なんだか、審査員思って、いたよりも偏屈だな。

そこには、長袖長ズボンのラフな感じの男が立ちすくんでいた。

「それでは、回答用紙と鉛筆を配るから、絶対それ以外の筆記を無知あわせるなよ」

今日もいい天気だ。アイスが食べたい。

試験会場は、『我バルト王国』の首都『ノキベ』のとある一角にある『クノベラクドナス』。

王国最も領域、聖域と言った方がいいか。

ここには、古人からの言い伝えがあって、神が降臨し、全てをを葬り去って帰ったという。

まるっきり、間抜けな話しだがバカには出来ない。なんせ、堅っ苦しい国の長や役人が神神神神信仰心むき出しでいるからな。

めんどくさい事に巻き込まれないように、神っているが、いつ、神病院にかかるか分からない。

だからこそ、試験は筆記に置いては、有利と言うべきか。

殆ど、神類で助かると言うか、別に、簡単な訳ではないが、出て来る問題に結構、高確率で神類のワードに絞られるため、

ああ、もう、強いて言えば、簡単だ以上！

「それでは、問題用紙、回答用紙、受け取った者、さっさと始めろ。

失格にするぞ！
それから、休んでいる人は即、失格だぞ！
あと、消しゴムを使用したり、鉛筆の芯が折れて記入できなかったり、回答枠から線が飛び出したり、紙を落としたりしても失格だぞ！
最後に、頑張れ。」

言いたいだけ言ってくれて、お疲れさん。悪いが俺は、今言った注意に該当するヘマはしない。

どうして、そこまで自信過剰に判断できるのか疑問符を捧げる彼らに説明するなら、今の今まで、爪楊枝と墨汁だけで、授業を受けていたからだ。

それと、…

天井に張り付く蛍光灯を見上げる…

家におれを待ってくれている人が居るから…

絶対失敗なんて出来ない…

次回
諦めるな。前をみろ、
友達になれそうよ。

4

母は言いました、「そんな、死ねない人間に育てた覚えはない！」

問3）上記の演出から見て、適切な応答を応えよ。

答え（神を称える

本当に、こんな問題ばっかり並べていると、まるで奇人が書いた随筆の用に見えてくる。

早めの内に書き終えないと、こっちの精神が狂いそうだ。

筆記如く、鉛筆を滑らす速度は一定で周囲の音響と同調して、至極場にとけ込んでいる。

それでいてか、試験にこれまでにない集中力と可動力が追加される。

怖いぐらいに…

…恐怖さえもこみ上げてくる。

考え過ぎかどうかは知らないが、アイツ等はこうして、洗脳じみた、…儀式と言うべきだな、そう言った儀式を俺らに強要して忠誠心を言えつける策なのだろうか？

…手は動く。頭も働き冴えている。

この調子で行けば、確実に成功を納める。

だがしかし、何かがこみ上げてくる悪寒。

気の所為と言えば、無論気の所為になるのであろう。考えても性が

ないが、考えることしかできない。まるで尋問だ。

コトシラは、ふと、何処でもある教室、訂正、聖域を視線だけを巡回させる。

…彼らは、何だ？

彼ら、僕らから観ると、彼らはちょうど視察のそれと同等な巡行を施している。

つまり、彼らとは、このお国の上等にあたり、王国の所有を有する。天皇な輩だ。

これはこれは、女々しいお嬢様までご登場の様子だ。毎年毎年こうして、低受験者共々の視察を繰り返し行われているというのなら、さぞかし退屈な動物園巡りであろう。

「彼らに、鉛筆でも投げてやろうか…」

回答用紙は既に、神で覆い尽くされている、完全回答だ。終了時刻までまだ幾度か、時間が余っている。

心にゆとりが出来たからこそ、言えた口だ。それでも、つぶやきレベルでほざいた口ではある。

考える猶予もなく馬鹿な口が開いたまでの話だ。

と言いつつ、叩きどころを探す為、再度彼らを吟味。

「…」

なんだか、この街ではどう観ても浮力が違いすぎて、物理的に浮い

て見えそうな、女々しいお嬢様を取り囲む、白ずくめな連中は、実際に邪魔苦しそうだし、暑苦しそうだし、観てられない。
頑張って働いてる熱意的なものは感じるが、残念ながら脳内で存在削除しています。
一方、女々しいお嬢様は、このお国の上王様。
とは、僕の知識からは判断しがたいが、外見から観て、肯定を呑もう。

まず、装備品からして品質、デザイン性、実用性の無さ、が一段と格別だ。次元すらも歪んで見える。

「えんぴつでも投げてやろうか…」

おっと、いけね。
少し前の声音量より、若干大きめの声がため息と共に逃げていった。

念の為、顔を伏せて、平然を強する。
わきの下から、横目で様子を伺う。

幸いなことに、審査員は耳をくぐもるだけだった。

「ふ〜」

精神を落ち着かせ。顔を上げる。

！

おれは、生きていてここまでバカな奴は観たことはない。
一番始めに、一徳べきだったな。
前方に居座る。受験生。

脳内削除も完璧に、完了していたがまさかここで伏線が忍び寄るとは…

受験番号記載の番号布を安全ピンでくくりつけ、始終、落ちとかないご様子の受験生が立ち上がった。

「やってられねー、帰る」

受験生はスタスタ歩行し、教室を飛び出す。

ん？それで？

…もうおしまい？

「哀れな愚民ですわ」

お嬢様、が喋った。

思ってたより、古典的で助かる。

第三者の立場から傍観してると、世界があからさまに見えてくる。

都市伝説的な受験生、その言葉だけを言うために生きているようなお嬢様。

けどけど、やっぱり俺には、アイツしかいない。

早く帰って、家がどうなっているのか。

出迎えて暮れるのか。

考えるだけで満たされる。

と、そろそろ時間だ。

試験なんて言っても所詮は、紙と筆記でカキカキするだけのお遊戯なんだと実感の色が隠せない。

「え～、それでは、終わりだ。終了終了、筆記を置きたまえ」

黒板の教室は、なんて物寂しいものか…

イタッ、

激痛は一瞬だ。どこかの一般生徒が放り投げたのが偶々頭部に直撃したらしい。不覚にも痛点を突かれたと述べるべきだな。

頭をさするながら、剥げていないか確かめる。

大事には至らなかったが、もしもの事柄を想像したら…それだけでゾッとする。

「コラコラ、無用に筆記を投げるではない、投げた者は失格だぞ～」

へ、

は、

ざまーみろ、いわんこっちゃない。

気を抜いて油断するから悪いんだよ。先生始めに言っていただろ。紙じゃなくて神だ、筆記、回答用紙、問題用紙合わせて神と呼ぶ。この聖域では、三つ揃って、神の私物と呼ぶらしい。既に、この情報は情報屋から引っ張って来たからな。

「先生～、そんなのないっすよ～へへ」

「ちょ、聞いてないぜ。ルールをもっと分かり易く解説して欲しかったー」

観ろ、木偶の坊らが戯れ言を訴えているぞ。今夜の飯は美味しく頂けそうだ。

「あれ？綺麗なべっぴんさんと厳めしい近衛らはどこに行ったんだ！」

帰った、としか言えないだろ。

「四の五の言う前に、後ろから紙集めろ。答案用紙と問答用紙は、ゴミ箱にでも捨ててくれ、」

答案用紙と問答用紙？嗚呼、回答用紙と問答用紙のことか。

言われたとおり、二枚の用紙を握力で圧を掛け押し縮め、紙屑ボール形を整え、教室の隅に、設置されたゴミ箱に大車輪投法で放り投げる。

見事に吸い込まれる紙屑。

あれ？さっきまで、手に汗握って、記入したあれは、どこ行った？そうか、ゴミ箱に捨てたのか…

すると、後ろからえんぴつを回収する生徒が近寄る。試験が終われば、ただの他人。

…えんぴつ…を握っているぞ？この一般生徒。おれのえんぴつが欲しいのか？

変わった者もいるな、この世には。

「ほれ、えんぴつ」

「え、あ、うん」

ちょっと、挙動不審で穏やかな人。
多分、この人も苦労しているんだろうな～感傷に浸るおれ。

「では、これで解散とする」

これで終わりかと、弱なる物足りなさとやっと終わりかと、労働感に誘われる。

「ふー」と一息切らし、

「さて帰るか、過ぎ帰るかっ」
おれは、オレてらしく。両手に何も携えずに、教室を跳びした。

この時点での僕は、まだまだ、全然知らなかった、知るはずもない。
ここまで、脇役と思われ、二度と関わらないと思いすら起きない彼らが、いずれ、深く関わってしまうことに…

次回
帰宅路につく。
ここから自由だ。

5

明日は面接だ。気を引き締めなくては…

僕はコトシラ。帰路に定着し、今は落ち着いた歩調で二足歩行の真っ最中だ。

神の聖域は、王国最大の建造ビル、通称『バマクラマ』の北から斜め八十度に広がる『自由線境界』の中央に分布している。

普段は『自由線境界結界』で一般人は観光も出来ないが、この特別な日にだけ、場内に入場出来るってわけだ。

イメージは、なんだか安い造りのミステリーサークルにもよく似た地上図で取り囲まれた廃墟の学校のような、如何にも、風変わりと近寄りがたく悪趣味な仕様が施されている為、歪だ。

広さは、『マイガル広場』四個分と思っていた以上に、狭い。

教科書に載っている画像写真を見てもそうだった。

未練がましく、もう一言言うのなら、聖域内に入る時など、パスとか、証明書とか必要ないらしく、威風堂々とポッケに財布と小銭だけを詰めて、ガリマタ歩行で聖域を去ろうとはしたが、

クールに外に出た。

ちなみに、おれは商店『ハジキ』道草を食おうと思っている。

時間帯にしては、午後二時を回っており、程良く、思想錯誤に小腹が空いているような気がしていた事による、自分自身の食欲精神が刺激され『食べたい』と思いたいが、『食べたい』と想ってしまっ

たのだ。

「なぜ、想ったかって？…カナメはやはり、昨日のアイスが心残りだったから、ハハ」

自分で自分を突っ込みます。小難しい語源を並べて誤魔化すより、初めっから、アイスが食べたかったと言えば良かったんだよ。

はは、ウケるウケる。

と、前方不注意でどなたかとぶつかるコトシラ。

しっかりしろ！コトシラ！

「おっと、いけね。ごん面なさい？何方さん？…」

おれ、コトシラはぎこちない体制と不バランスと揺らぐ体をおっとっと、と額に手をやり、状態修正しながら、地面ばかり観ていた視線を前へ…

「すみません！」

「その前に誰だよ」

あ、

思い出した。こいつ、受験番号４１９番の『やってられるか！帰る！』君だ。

名前と顔を覚える習慣の無いおれでも、コイツだけは、伏線で脳内に血の気が弥立つほど印象を獲得している。

ここは尊敬と敬意を孕んで省略して、『シイク（４１９）』君だ。

「なんだ。シイク君か、何をしているんだい？こんな所で…」

今日は気分がいい。偏見的な彼の姿だって許すし、立ち話もしたい気分だ。

「シイク？…キミ僕の知り合い？かなんかだっけ？僕記憶に無いんだけど」

僕とは誰だ？ああ、シイクか。

「そうそう、おまえの知り合い。…で、気に障るのなら控えるけど、自動販売機の前で右往左往立ち往生しているのは…どうしてだい？」

お金を落として、茫然自失となっていたか、金が無いから邪な考えを企んでいたかのどちらかであろう。

試験中に罵声を吐いて教室を飛び出す奇人だぞ？ろくな人間ではないのは確実だ。

「あ、いや、これは、自分の情けない姿を悔やんでいただけです。」

角度を変えて、自販機を観てみると…彼の言う通り、鏡の劣化版並みに、冴えない眼鏡がそこにいる。

「メガネの調子が悪いのか？発狂してしまうほどに、レンズの度が合わなかったのか？」

心で笑いながらも、クソ真面目に返答する。

「あ、いや、あれは…恥ずかしい所をお見せしたようですね。あれは、反抗期です」

うぶ、シイク君。羞恥心とか備わっていてほっとするぜ。何よりだ。

「反抗期？お前は、社会的に一人前になって、独り立ちとかしたくないのか？親孝行したりしないと親が悲しむぞ？」

我ながら、俺の人生観では説得力もないとんでも無い事を口にする用になったもんだ。迅速にアイスが食べたいし、今の言葉は墓場まで持って行こう。

「親？笑わせますね…うひゃ、親なんて、今の世に生んでくれて、ありがとサンキュウベリマッチって所ですよ。」

親に虐げられる気持ちは僕には、わからなくは、ない。だって、殺しちゃったもん。

「それもそうだな、親孝行はお金で解決する。ただし、それは哀しいこと…」

チラリシイクを面と向かって観ると…

メガネが覆い隠す顔は、意外と整った顔立ちにで、びっくりした。

「僕も終わっていますけど、貴方も綻びてますね…」

意外と良い奴！

「これもなんかの思し召しだ、商店『ハジキ』で美味いアイスでも飲食しに行かないか？」

彼とは、馬が合うらしくここで分かれるのも中途半端な気がした。そこでの提案だ。嫌な感じはするが悪くはない。ただ単に、同類の磁力が働いただけであろうと察する。

「良いですね。行くとしましょうか…それと、質問があります」

そう来るか。でも、問われたら答えなくてはな。無言で、言ってみろ？の仕草をする。

「僕の知り合いではないですよね？どこで縄絵を知ったのですか？」

想像はしてた分、返答には困らなかった。

「お前の席の後ろ。…から高みの見物で知った。」

お前のその番号布は、本名なのか？妙にとっ掛からなくて、不安の汗まで垂れてくる始末だぁ。

「僕の存在なんて忘れてしまった方が賢明なのに、…敢えて、覚えて声を掛ける辺りから何か良いことでもあったんでしょうね」

「ああ、そうだが」

王国のとある一角に徒歩で進行中。

「良いですね。僕からも何か、差し上げて良いでしょうか？」

なんだか、気持ち悪くなってくるのは気の所為か？

「」

ん？消えた。

どこ行ったんだ？

おれは、その一瞬で何が起きたのがわからなかった。
何かが変わったようにも思える。
しかし、何かが変わった気配がない。さっきまで居た街並みは町並みのままだ。
判断に、どうしようが混じるがまだ現実だ。
正気ではある。
並大抵のことらり何とかなった風に、…何とかなっている。
しかし、しかしだ。

どうして、シイクはいない？
意味が分からない、全く皆無だ。話しがつかめない。

……

やっぱりか。呪いは持続中ってわけか。

『忘れることのない』

襲いかかるか…

ま。気に悩むこともない。
バグっているのは、俺の方だからな。

この後のでコトシラは、商店ハジキでアイスを買うが当たり付きでもないアイスに、当たりがでた奇跡は、彼の仕業がどうかなんて知るはずもない。

シイクは、一番始まりから存在していなかったのだから…

時間は経ち、我が地元と実家。
コトシラは自前の持ち合わせた。脚で故郷まで辿り着い着いたのだ。

「フー、五時間ぶりの家だぜ。」

ドアノブに手をかざす。

年期の入り浸る突起は、ひんやりと冷たい温度がほとばしる。

自動ドアとか思ったら、違うんだなこれが。

「あら、何方ですか？」

何とも言えない。棒読み。
おれは心なしな、言葉に温まる派なんですよ。滑稽ですよね？

次回
明日は休め。

6

動静、微動だにしない。
其れ即ち、この家の動向だ。

「あの～古見子さん？」

「何かしら？」

おれは所持品ゼロ、それでいて、驚異的な速さで家内にあがる。
ゼロではないか、財布とそれ相応の小銭がポッケに混入している。
歩いてる時は、ジャラジャラ効果音は響かなかったが家にあがると、
息なり発声を上げる。

どんな構造になっているのか、これを購入した完全百円均一『マガノルノライス』に問い合わせしたいと思った。
思っただけだ。

「ここに居座ることになったのは、おれの所為ですけど、恨んでいません？」

よく見なくとも、彼女の頬はコットン繊維質のテープで痛々しい。
そこのこの問をぶつける。少なくとも確認のためだ。しょうがない。

「別に平気ですけど、問題はないわ」

恨んではいません、と答えたのであろう。

「ん？一見、前より生活感のある家の見取り図に変貌しているが、掃除等の家事をこなしたのか？」

引き出される出かけた後の記憶と、今観る、家内の景色とが一致しない。

要するに、綺麗に片付けられている。

暇なのか？思うまでもない、今なのであろう。

選りすぐって腕を掛けて掃除したに違いない。

「う…ん」

一応。

「ありがと」

午後五時、胃の内部では生半可に溶けたアイスが吸収されている頃合いだろう。

自覚はないが。

そんな、どうでも良いことを思想しながら、おれはその足で茶の間へと移動する。

この季節、外は薄暗い設定だ。現に薄暗い。

「ドッコラセット」

古見子さんが先に、こたつに和んでいる後に、カタカナ口調でゲーム機をワイヤレスコントローラーで電源を入れる。

言っておくが茶の間に、ゲーム機本体は存在しておらず、自分の遊戯室イコール寝室から、出力コードを引っ張って来てのゲーム機の起動だ。

「午前中はずっと、将棋遣っていたし、今回は『風のクロノア』＋2『でも交互プレーするか？」

説明しているわけではないが、午前中は内蔵ゲーム『将棋』を仕切りに、一手一手返しプレーしていたのだ。

「何でも良いわ。遣るなら徹底して遣るだけ」

そのノリ、おれは好きだ。

一番ゲームが遣りやすい。

雰囲気的に。

「それでは、行きますか」

ブォン

　キリキリキリ

ホワン

起動音といい、高画質と良い、最新鋭のゲーム機はとても好感覚に、楽しめる。的確な言い方ではないが二文字で、

愉快だ。

瞬きする間もない、ロード時間にふと、思った。

多分、おれは矛盾している行為行っているのかもしれない。と、

ドコからドコまでが、矛盾しているか…言いくるめるなら、生き方についてだ。

『過去おれ』は、独りで生きていける、苦悩とお菓子さえあれば充分だ、などと言っていた用な気がする。

『今おれ』どうだろう？ほん少し、暖かいこの気持ちは何だろう？知ってはいるんだ。分かっていないフリをしていだけだと…

初めっから、弱い人間で、実際にも強い人間なんて居ないのだと実感する。

これが現実。

どうしても、人間な俺たちには、そう言う者が必要なんだ。

どう言うもの？

どんなもの？

もの？

いや人

人生のパートナーが…

「聞いても良いかしら？」

「どぞどぞ、」

こたつには特殊加工を施した電熱線が取り付けられている、使用するときだけこたつ内の気団を暖めてくれる。
夏には涼しく快適に、
秋にはほんのり熱く、
春は、微妙に寒い。

と設定され、設計されている。
豆知識だと思ってくれ。

「夕食とかどうするの？」

把握していたわけではない。
そうなるような気はしていただけだ。

「カップヌードルとかで、良くないか？手軽く」

健康面に配慮されていない、食品を選択する。…彼女も読み通りだろう。
おれの華麗なる朝昼晩の食事種は、
カレーラーメン弁当だ。
一から全て、コンビニ品。

自分で言ってて笑いそうだが、前にも同じ事で笑ってしまったので
今日は、お預けだ。

「それはちょっと、マズくないかしら？」
…
どちらのマズいだ？

食品自体の味での過程の不味いか？
では無いと肯定しての
食品種の厳選が誤ったか？
ラーメンは嫌いか？栄養面での気遣いか？
ここは…

「分かってる、これからは健康にも気を使うよ。」

拍手ですね。なかなか言い出せないよね。僕も成長したな、選択肢の選び方…

「あら、分かっているじゃない、そう、それ」

ああ、生命再臨回数が尽きそうだ。

「はい、ぽす」

本体とコントローラーを繋ぐ紐がないため、放り投げ、手渡す。

大丈夫、彼女に任せれば、必ずゲームオーバーは回避できる。

カチャ

「？どこに行くのかしら？」

「ドッコラった、？…憚り所にお手洗いしにだが？」

上半身を錐揉みしながら、手を突き、立ち上がり祭に、言葉を返す。

憚りはトイレ。

「うん、いってらっしゃい」

彼女のいつもの口語が、たまに脱線してしまい傾向は敢えて、とやかく指摘しないことにした。…今決めた。

ギコギコ

冷たい廊下を一般的な要因で踏みつけ進む。
毎度毎度語らうが『歩く』が正しい表現。
ギコギコ

足音がビビったがこれはいつものことだ。年期が入った五十年前の建築物だ多少のボロは許すしかない。

ガチャ、パタン

おれが家族というモノがまだこの世に留まっていた時は、まだまだ、ガキで今よりずっと楽しかったに違いない。
仮説論類に、よっぽと近い言い方だがおれには、過去は過ぎ去るモノで未来は、大剣に貪られるモノでしかない。

願ったモノは叶ったが、きっと誤っただけの性もなく哀れで悲惨なお話なんだ。

いつもだったら、そうであろうとか、そうだったが用意られる。
けど、こればかしははっきり言いたい。

ザザー

ガチャ、キィィ。

どうも俺は、脳内演説が人より二、三歩得意らしい。
滑稽な人生観を長々と語って何になる？

ハハ、説得力が感じられない、おれはもう、人としての何かが虫の息なんだろう。

自覚はしている、親殺す所から自覚している。とうに悟っていた。

ギコギコ

本当に名残惜しい気分だ。
体が壊れる前に心が壊れるな。

ギコギコ

「よう、元気してる？」

これは自分の声、古見子に話しかけたのだ。

「相変わらず、元気してるわよ」

あっという間に、行ったことのない初めてみるステージへ進行形で進んでいるキャラを観る。クロノアだ。

「凄いな、お手上げだ、お前が如何様を屈してプレイする人ではないとは、思うが、疑い深い…」

信じていない、訳ではないがそう言いたい。願望？

「こんなの容易なタイトルは、如何様する価値がないわ」

ってことは、何処かでこっそりしていたりするのか？他のタイトルでは…

次回
強火で三分

7

あらすじに、予め細工している。

ゲームは好きではなかった。好きではなかったが弄ぶのは好きだった。

イカレた事にも、おれは確実に着いていない。ゲームが俺らを、進化させ、ゲームが俺たちを縛り付けたのだ。

証拠、何もない。

「次はおれの番だろ。貸してよ」

怒鳴るように優しく呟いた。この様な高話術を磨くのは、苦難な道のりと道程とが入り浸る、険しい道筋を通行しなくては身に付けきれない賜物である。

「良いわ。取ってみなさいよ。…けどね、渡さないわ」

ムキになったら、こんなの反応を反響するのか…なるほどなるほど。徐々に、彼女の脳内回路が手に取るように解ってくるのは、時間の問題らしい。

「そんなこと言わず、な、早くよこせ？」

有望視なものの見方で、説得と回収に当たる。

「性に合わないことは、避けるべきね…」

目を反らすようにして、アナログコントローラーを放物線上に乗せ、徒手する。

「お…わっと、」

健気なしくエビフライをキャッチ。

「こっからは、おれの時代が始まるぜ。」

コタツの角に、上記の言葉をぶつけ、操作開始する。

確認もとらずに、世界観移動を選択し、強豪揃いの場所に転生を図ってしまった。

ピュン、ビルビルビル。

わっふー。

「な、なんだ!、語彙では表現できないそれがウヨウヨいる!地獄編だ!」

画面中央の可愛らしいキャラクターが、愛くるしく悩んでいる。

ひとまず、一時停止。

「どう?コントローラーだけで電脳世界から落としたのよ?恐ろしいを通り過ぎて、有頂天が精神を駆け巡るでしょ?」

確かに、確認と同意を取らずに先走った行動は、血迷った結末にしかならないことがよぉく、

思い知った。

あれだけの語彙では表現できない軍勢が中央無人に、物理法則をすっぽかして、爛々乱舞を展開してしまったっては、打つ手は皆無に同等だ。

「ヤられたよ。おれの負けだ…」

折角、おれの気持ち悪い兼用で動きに動くコントローラーさばきを、トクと診せてやろうと思ったのに、

それっきしのそれだな。

「もしもの事は起きないと想うけど、負けたら、夕食を一緒に作ってくれるかしら？」

一方的な条件だが、拒否権は剥奪されているに同等だ。おれ自身がゲーム使用権限を剥奪したようなもんだからな。

迷ったあげく、テレビ画面、再度確認と現実逃避をする。

そこには、観るも無惨な、語彙で語源不足で表せない『それ』がウヨウヨ。

愛くるしくキャラの眼前には、『それ』がすぐそばまで来ている。

「〜どうするの？…二択しか無いし、片方は自殺行為よ？」

二択とも、爆弾だ。

一つ、ゲーム再開、ぎゃー。
一つ、コントローラーを返す、ゲーム再開、ぎゃー。

後者の場合、おれの方に所有権があるため、イトコにヤらせた所で、イトコが無操作に、スタートボタンを押すだけでおれの敗北が決まる…。

おれは、冷や汗を欠き垂らしながら、イトコな彼女の双眸に眼球を送る。

大きく深い瞳は、おれを観ている、…何を考えているのかは、論さえも上訴出来そうにない。

これをおれの危うい語彙量でほのめかすのなら…
漢字二文字で深林。

が俺から観てのイトコの印象だ。

「了解だ。承知した…」

少し休憩とばかりに、コタツテーブル上に置いて置いたコントローラーを手に取る。
引力の影響力交えたかのように、吸い込まれるハンド。

本気も本機も部屋の中だ！ここには、コントローラーとハンドしが

ない！

ヤられると分かってて、ヤられる！
別に良くはない。けど、悪くものない！
どちらでも良い！

一番の重要視は、ヤるか、ヤられるかだ！
「ひとまず、深呼吸させて？」

「良いわよ。止めはしない」

ひー

ふー

みっちり、リッチな気分。

よし、今なら逝ける！

今まで以上に、力いっぱいスタートボタンを叩く。

ぎゃー

終了、ご愁傷様。

「ま、けた…ぜ」

当たり前だ。割り箸を横に割ると非常に見えるくらい当たり前だ。
なにせ、　眼前の迫る『それ』をどうやってよける？自問自答を返して、不可能だ。
テレビ画面の世界は幾何学的に成り立っている為、無理化が利かない。あるに会ったとしても、それ自体が世界の一部で、その道筋を通れば必ず、歪みが生じる。

必然的に成り立つ世界。テレビ画面。

出来すぎて、偶然すぎる世界。おれら。

族に言う。越えられない壁だ。
おれも、世界の理屈は了承済みだ。影響力可不可もパワーバランスも頭に刻んでいる。

そのためか、学歴は並み以下だ。
それでもいいか。

「負けね…」

「ああ、完敗だよ。」

まぁ、神様も許せる範囲内だろ。
おれの未来を代償に、しているのだから。
「んで？もう、真っ暗だが今何時だ？」

ホームボタンを押せば、分かることだがそんな事の為に、手を可動されるわけにはいかない。一種のプライドだ。

「体内時計を実用化なさったらどうかしら？午後六時を回った所よ…」

おれが帰宅してから、一時間しかたっていないのか…ここまで楽しんでおいて、それだけの時間軸しか…

「？どうしたの？顔色が悪いの？それとも腹の調子が悪いの？」

根回しの良し悪しがいいね、腹が減っているんだよ。

「心配すんな、腹が減っているだけだ」

とりあえず、遊び場終わり。ゲーム本体の電源を落とす。

まだまだ、おれらはガキだからな。色々と引き締めていかないと地獄を観る。

「と言うことだ、厨房に急ぐぞ」

兎に角、コタツから出ないと話が進まない。おれは勢いに身を投じて、螺旋の如くとコタツから脱出する。

それは、イトコも同じだ。
普通に、コタツから脱出。

トコトコ厨房に向かうおれは小学生の様に、輝かしい無邪気な姿に見えたであろう。
厨房目前と差し掛かった所で、ふと、あることを思い出す。

今日の昼は、食材がなく。蓄えていたカップラーメンで補ったが果たして、料理が出来るほど食材は貯蔵庫に在るであろうか？
「って、買い物とか行ってきたのか？貯蔵庫は、アテにならないくらい、貧困な食材量だったはず…」

期待と過度な不安が募る。

「安心して、あなたが頑張っている間に、調達してきたから…」

と言うのは、イトコの古見子だ。

古見子は、その柄に合わないとされる、『笑み』を浮かべる。彼女はイトコだ。

頬には、昨日の件での痛々しい有り様が現れている。応急処置は施してあるが…

「ああ、そうか、助かるよ…」

つまり、ありがとう。

次回
夕食おろか晩飯

8

外堀をありの巣が囲う、考えただけで怯えてしまう。

まさか、モンスターの肉片だったしないだろうな。だとしたら、厨房某台所が生臭くなってしまって、それでいて、慣れてしまってしまった、自分を想像するだけで腐ってしまいそうだ。

おれは、冷蔵庫と対面、露わに、立ち尽くす。
相対立と対照的なおれと冷蔵庫。
取っ手は、開けんとするばかりに飛び出している。

それに対し、彼女は、どうやら何を作るのかに迷っているらしく電気のヒモを目見つめている。

…それが怖いのだ。

何を買ってきたのか、言ってくれないし、何より、何を作るのか決まっていないのに、食材売り場で買いあさった食材とは一体何だ？

考え過ぎるのは良くない傾向だ。
されど、今は慎重に行きたい。

冷蔵庫を開いて確かめるだけなのに、こんなに用事深く心の準備をしないといけないの？とか言われそうだけど、なんだか怖くて、怖くて性がないんだ。

「せめて、どういう風な物が収納されているのかだけでも答えてく

ださい。ヒントをください。」

媚びるように頼むおれは、怖がりな哀れなお人に違いない。でも、開いたとたん…バーンと効果音と反響音に狭まれて死ぬのは嫌だ。

「発想が豊かすぎるのよ、あなた、中身は普通よ」

普通…どこまで信じていいのか、計りが必要だ。囮を忍ばせても良い。小鳥にせがむのも良い。

って、おい。

何言ってんだよおれ。

雰囲気に呑まれすぎだろ。何も考えず、あければいいじゃねーかよ。

かけ声と共に、冷蔵庫の取っ手を握り開門する。

ほれ

あっと言う間に、内部を一覧出来るほどの空間が出来上がった。

…思い過ごしは、思い過ごしだったと息を呑む。

至って普通が適当とは、恐れ入る。

てな感じで、普通を連想させる品々が列を創る。

今晩は、カレーだ。

普通な品物を観ると定番色彩る『カレー』の単語が思想雇用空間にこぼれ落ちる。

これはもう、カレーで即決だ。言葉に出して、伝えよう。

「今日はレタスとほうれん草を刻んで炒めて食べよう！」

どこの口が駄弁を申す？あ、おれか。

「そんな、料理があるの？私の耳が覚えている限り、初耳よ」

当たり前の朝飯前だ。おれの口でも初口に当たる造語を想像しないと解釈がつかん。

「引いても無駄だ。これに決めたんだ。変更は死体になっても変えられん」

壊れたか、おれの口。薄々気づいたがここまでとは…

「そこまで、大胆な発言をするのなら、そのレタれん草炒めと斬新な食べ物を作るしかないわね。それでもいいの？」

確認の意を圧す様に、返答。

心此処に在らずな発声器官は言う事を聞かずに、紡ぐ。

「料理なんて、手引き書や調合書なんかに頼らずに完成させる、させてしまうが普通何だよ。」

冒険者は一度は、吐露したことがありそうな言い回しだ。

「…言うわね。なら、早く調理に当たりましょう？」

本気で口が自動的に動いた。制御のしようがない口を、黙らせつつ。

頷いて、食材を取り出す。
…冷蔵は、長時間開いたままにしておけば、節電など環境などの小賢しい勿体ないお化けがそこら辺を闊歩遊覧してしまうと妄想してしまうので、すぐ閉じる。

両手で持ち上げた作物は、低温度を維持しているため、冷ややかに手が冷たい。

まるで、凍りそうだ。
早めに急いで、イトコが用意したまな板に乗せた。

「危ないわよ、そんなに焦って、持ってきたら…勢い余って、包丁にでも突き刺さったら事故死すまされないわよ」

と、言われ申されても、両手両腕が冷たいんだもの。と言い訳は心に吸い込まれる。

「おれも手伝うよ。その法が効率に良いし」

料理が苦手そうなおれだってそこそこ、親の手伝いとかしたし、家庭科で鍛え上げたし、問題ないハズだ。

「じゃあ、米をご飯に変えて、…」

？炊飯器に電源か入っていない事に、やっと気づいたのか？

おれが冷蔵のボディを吟味していた頃合いから仕込みはしていたが、わざと電源を入れていなかった。
って、線で観ていたのだが、まるっきし、忘れていたのか…？

「了解」

言い放ったコトシラは、炊飯器のコードをコンセントに言えるとこれから始め、早炊きモードで開始ボタンを押した。

達成感の無さに驚く。

もっと、手伝わせろ。

「他に、手伝って欲しい作業とか在る？手伝い足りないぜ」

イトコの横顔に話しかければ、包丁を手際良く使いこなして、緑の野菜たちを切り刻んでるではないか。

流石、武器に同じ様な刃物を両手で使っているだけは、在る。

無駄に、接近したら何気なくバラバラにされてそうだ。

「…じゃあ、次はフライパンを加熱させて、私的に適温かな？と想った時点で灯油を注ぐの」

トントントン、まな板が悲鳴を上げている。

おれ、コトシラは、スライドする戸棚からフライパンを取り出す。

焜炉にフライパンをかぶせ、凹の字と似た相似でセッティングして、からの着火。

バチ、ボー

白い閃光と共に、青い炎が靡輪たる（ナビワたる）。

言っておくがただ火が着いただけです。深い意味はありません。

「…」

手伝う事がなくなり、辺りをぐるぐる放浪。

古見子さんの前に存在するまな板の家には、観るも無惨なレタスとほうれん草が広がる。

バランスを考えたのか。そこに、ピーマンとニンジンが混じっていた。

「…」

無言な彼女は、すでに準備を終えた熱たぎったフライパンの上に、まな板ごと放り込む。

ジャーっと、奇声と罵声を奏でる野菜たち。程よく、様になってるフライパン中の住人たち。

「味付けとか、どうするんだよ？」

フライパンの住人を炒めつけるイトコに聞いてみる。

「コショウだけで充分、でしょ？どうせ、胃袋に詰めるだけだから…」

納得のいく解答に、同意。

「明日の面接技能力表現試験とか、あるじゃん？お前は、どんな感じで受けだの？」

試験官と試験管の事について、語ったりするのだろうか？
あ、因みに、ほぼ一対一の語り合いと思ってくれ。
変に、武道で争ったり、特技を晒したりするような荒々しい企画ではない。
単なる面接だ。

「…これ言っちゃって、良いのかしら？」

「言っちゃって、くれちゃって良いですよ。古見子さん」
背中越しだが、何となく、口に出すのが恥ずかしいご様子に思える。

「将来の事とか…かな？」

そうか、そうか、夢を語ったりしていたのか。
昔の古見子さんは可愛い事を言っていたんだな。
イトコの古見子さんの事を少し知った。コトシラだった。

次回
食べ物

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5555x/

アクセストロベリー

2011年10月20日08時31分発行